



# 公立高入試 後期試験がんばれ!

— 昨年の後期で合格した先輩の声 —

★A・S君 新松戸教室 中3Sコース在籍  
(進学先) 県立小金高校

前期試験の合格発表があった頃の私の学力では、後期を受けても落ちていたと思います。

そこで、私は後期試験までの一週間に、今までのテキストやワークを解きまくりました。苦手科目を重点的にやりつつ、全教科、精度の高いテキストをやり込むことで前期試験よりも約50点の得点アップをすることができました。

★M・Oさん 新柏教室 中3Sコース在籍  
(進学先) 県立東葛飾高校

自分の番号を見つけた瞬間、一番に創学舎の先生方の顔が浮かんだ。前期に落ちて、後期までの期間は特に、塾の存在をとて大きく感じた。先生がくれた言葉は本当にすごくて、魔法にかかったように私は強くなれた。

★S・Y君 柏教室 中3A2コース在籍  
(進学先) 県立小金高校

実は十一月まで小金はほとんど無理だと言われていました。しかし、小金高校という夢を捨てられなくて必死に勉強しましたが、前期は落ちました。ここで後期も挑戦し、落ちたら何か言われると思いましたが、



志望校を変えるなら私立に行ったほうがいいと思ったので、そのまま挑戦することにしました。残り一週間は学校が終わってから、塾に来て、先生と一対一で勉強して量より質を求めて勉強しました。その結果、後期で合格できました。塾のI先生は入試日に学校まで来て応援してくれました。たくさんさんの人の支えがあったからこそ、可能性が0とも言われていた小金高校に合格できたと思います

★W・Mさん 我孫子教室 中3S1コース在籍  
(進学先) 県立東葛飾高校

公立は、前期選抜は落ちてしまったけれど、自分を信じるという先生の言葉を信じて頑張ることができました。最終的に後期で合格。諦めないで今まで頑張ってきた。本当に良かったと思っています。先生方大好きです。ありがとうございました。



★S・Mさん 江戸川台教室 中3A1コース在籍  
(進学先) 県立柏南高校

どんなに頑張っても成績が伸びなくて、いつしか勉強に対してやる気がなくなり、家では全くやらなくなってしまいました。だから、模試の志望校判定はいつもCかDでした。そのまま前期試験に突入し、江戸川台教室は私以外全員合格していました。「前期では絶対合格出来ないよ」と言っていた私でも、この結果にはさすがにショックでした。それから、先生と私の一対一の授業で、先生方は私の苦手なところを徹底的に教えてくれました。短い期間でしたが、この一年で一番充実していた期間だったかもしれません。最後に教室長の先生は「二度と前期のような思いはさせないから」

と言ってくれました。普段優しい言葉をかけられたことがなかったもので、涙が止まりませんでした。後期試験では、前日に塾でやった問題や、試験の始まる前に読んでいた創学舎のテキストから、いくつか問題が出題され、全部解くことが出来ました。そして二週間遅れの合格通知が届きました。本当にありがとうございました。

## 上京物語

「上京して今日で三年/どうやったら歌手になれるの?/その前にちゃんと働かなくちゃ」

深夜の弁当屋。有線から流れてきた、伸びのある印象深い声と、上京を歌う詞が、私の耳に残った。朝倉さやの歌う「さばの味噌煮」という曲。元々民謡歌手だった彼女自身、現在、実際に山形から上京してポップスシンガーを目指しているという。動画サイトでは以前からかなり話題になっていたらしく、夢はかなえられつつあるようだ。

私は、創学舎で勤め始めたころ、東葛地区の大学進学者の多くが、自宅から通っているという「こちらの常識」に、ちよっとしたカルチャーショックを受けたことを鮮明に覚えている。というのも、私の通っていた九州の地方都市の高校では、卒業生の半分は、九州各県の大学へ進学し、残りの半分は九州を出ていくという塩梅で、卒業したら家を出るのが普通だと思っていたからだ。もちろん、現在では、多種多様な大学が近場にある、という首都圏の学校事情や、今や、国公立大学の学費が、私立大文系と比較しても、そんなに変わらないほど高くなってい

ることを考えれば、わざわざ実家を出て独り暮らししながら通うというのは、あまり現実的な選択ではないと、合点がいく。



してみると、「上京」—東京とは限らずとも、生まれ育った故郷を離れた見知らぬ土地で生活するということが、地方出身者のみが経験できる、実はぜいたくな行為なのかもしれない、と思うことがある。上京を決める過程や、故郷を離れる感傷や、上京後の葛藤や、自己と他者(あるいは環境)とを相対化して考える機会が多々訪れるからだ。

たとえば、上京後に困難にぶつかると、ここに残るか故郷に帰るか、という葛藤を経験する。松山千春やさだまさしを引用するまでもなく、そのとき、それまでの自分の人生を客観的に見つめる機会を与えられる。そして、内省する中で、故郷の美しさや、家族や友人などの他者によつていかに救われてきたかということに気付くのだ。

上京の物語をもうひとつ。漫画家の東村ハルコは、宮崎市出身で、その作品はいくつも映像化されている。そんな彼女が、高校時代、美大への進学のために美術教室に通っていたころのことを作品化した。読むと、これが大変に素晴らしい。

破天荒な人物である美術教室の先生と、若さゆえ自我の肥大した東村とのバトルが、コメディイータータッチで描かれるのだが、恩師となつたその先生とのつながりは、プロの漫画家を目指して宮崎から上京した後も続いていく。その関係は疎と密を繰り返すが、当時は理解できなかった先生の言動が、大人になって、腑に落ちてい

く過程は、情感豊かに描写され、胸に迫るものがある。

東村は、作品化の動機についてこう語っている。「どうやって『美大に合格したか』『漫画家になれたか』と、よく若い子に聞かれるが、絵を描くという事は、ただ手を動かし『描くこと』『どれだけ手を動かしたか』が全てだ。日高教室で同じものを何回も何十回も強制的に描かされた。それがよかったと思う。楽しくだけではない、押しつけるような、きつい先生に出会うことも大事だ。根気のない子や頑張れない子、逃げで描く子は無理だ。絵を描くことに生活で一番集中していないと。しかし、口で言うと偉そうだし、若い子には伝わらないので漫画で表そうとした。若い子は、ある日何か降りてきて、いつかすつと描けるようになると思っ

ている。それは違って、きつなくても、想念の海の中から無理やり、何か掴んで引きずり降ろすしかない」  
若く未熟な時期があるからこそ、その後の人生が深くなるのかもしれない。幅跳びの選手が助走をためこむように。あるいは、強烈な光が、濃い陰影をつくるように。  
大学に、高校に、新しい門出を迎える諸君。まだ、試験が残っている人もいるが、先に伝えておきます。旅立ち、おめでとう！

(関)



# 恋空と雨音

●ある日一通の招待状が届く。結婚式の招待状であった。送り主はかつての教え子。彼の面倒を見たのは高校受験の時であった。今は都内の

銀行に就職し、今年27歳になるそうだ。彼は中学2年生までは普通の雨男な中学生であった。

名前をH君とする(彼のイニシャルである。嫌がっていました)。本人の了承を得ていますのでご安心を。ある日、何を思ったのか、妙なことを言ってきた。「先生、僕を青山学院高等学校に合格させてください。」あまりに唐突なので理由を聞いてみると、好きな子ができたとのことだった。その子は青山学院高等学校を志望しているとのことだった。「自分もその学校に入りたいんです。」H君の押しに私も一緒に青山学院への挑戦が始まった。彼女(私の教え子Wさんとしよう)の偏差値は70。H君の偏差値というところ、42<sup>3</sup>くらいだったと思う。

●初めはなかなか調子も上がらず、自習室でも居眠りが続いた。まあ、そんなものだろうと思っ

っていた。ある日、H君が肩を落として、教室に入ってきた。彼女に自分ではない別の彼氏ができたそうだ。青山学院への挑戦も終わったかなと思えた。しかし、それ以降、部活が終わってから、自習室が閉まる10時30分まで常に黙々と勉強するH君の姿があった。土日や祝日は開室から閉室まで、ずつとだ。授業や復習のやり方も変わった。毎日毎日、授業で学んだことを少なくとも1週間は繰り返し返した。質問はまとめて、どっさり。先生にいくつか離れない勢いだ。私もその異様な彼の変貌ぶりに心配になった。彼に直接聞いてみると、彼の答えはこうだった。「彼女をあきらめきれないと同時に、青山学院高等学校も自分はあきらめられない。僕は青山学院高等学校に入りたいんです。」という純粋な答えだった。

●あれから数か月後に模試があった。はっきり

覚えていないが惨憺たる成績であった。授業の終わりに私のところへ来て、泣きながらこう言った。「勉強ができない自分がくやしい。勉強に

没頭できない自分が情けない。俺はなんて格好悪いんだ。」泣いて、泣いて、泣きじゃくった。ただ、彼はくじけなかった。それから彼は普段通りのことを半年間続けた。学校がある日は塾へ来て、毎日6〜7時間。学校がない日は約12時間。日によっては1日もつとやっていたと思える日もあった。遮二無二ひたすら言われたとおりのことをやり続けた。ただひたすらに、ひたすらに……。

●それから、とある全国模試で偏差値87。順位はなんと全国1位。ぜ、全国1位って！私も驚いたというか、目を疑った。本人もあまり実感がないうた。その3か月後の受験で彼は開成、筑波大付属、早稲田に合格したが、選んだのはもちろん青山学院高等学校であった。本人曰く、「ここに入るために、勉強してきたので。」と平然と語っていた。



●私が何を言いたいのか。別に合格したいなら、彼氏や彼女を作れと言っているわけではない。誰かを好きになるくらいに自分の志望校を愛おしく思えたことがあるのか。勉強がでさなくて、心の底から泣いたことがあるのか。成績が悪くて、【本気】で泣いたことがあるのか。残念ながら私もないし、そんな風に自分と【本気】で素直に向き合える彼が羨ましかった。自分を素直に格好悪いと受け入れた彼はとても格好良かった。

●それから数年後、教室に日焼けをして細マツ

チョナイケメンが教室に入ってきた。「先生、ご無沙汰しています。」H君だった。あか抜けて

大学生を満喫している感じであった。「先生、ちよつといいですか。」と言われて、一人の女性が入ってきた。「僕の彼女を紹介します。」言わずと知れたWさんであった。彼女も見事青山学院高等学校に合格していた。入学早々、彼から交際を申し込まれたが、一度は断ったそうだ。しかし、彼の粘り強い押しに負けたらしい。それから11年の月日を経て二人はこの春に結婚する。結婚式場はアンバサダーホテル。(女性で知る方は多いかと思うが、TDR(東京ディズニーリゾート)のホテルである。)

彼曰く、「結婚式場は彼女の粘り強い押しに負けたそうです。」二人の歩む未来に幸多いことを願ってやみません。



●この創学舎ニュースを手にする頃、受験生の中には進路が定まっていない人も多いと思う。もし君たちが心の底から【純粋に、本気】で志望校に入りたいと願うならば、睡眠や食事なんかよりも勉強にガムシヤラになってもいいんじゃないか。おしゃやれや遊びに目もくれず、机に向かってもいいんじゃないか。【私はそんな姿を意外と格好いいと思う。】そんな時間を過ごして、あといんじやないか。あと少し、あと少し。長いこの受験生活とも終わりを告げることになる。あと少しだけ、頑張ってみようじゃないか。春はすぐそこまで来ているのだから。

(松尾)

### ▼▲継続希望の方へ▲▼

- ▶退塾や転校等で創学舎を離れた方にも、ご希望があれば創学舎ニュースを無料でお送り致します。
- ▶在籍していた教室までご連絡ください。